

大阪 川と 坂の 物語

四つ橋交差点の北西一帯は、新町という行政名である。かつては長堀川と西横堀川など4つの川や堀で四方をかこまれていた「新町」という、大坂では最大の遊郭街であった。

難波新地や曾根崎新地、高津新地などは私娼街であったのに対し、新町は寛永4（1627）年、幕府によって正式に公認された。

新町1丁目から西に向かって歩いた。ちょっと変わった匂いのする街である。四つ橋筋など表通りは大きなオフィスビルがならんでいるが、街の内側は高層マンションがあったり、卸問屋の建物、そば屋など小さな飲食店、スーパー、倉庫、昔ながらの木造家屋、さらには軒を暗く沈ませ、板塀に草が這った廃屋もあった。

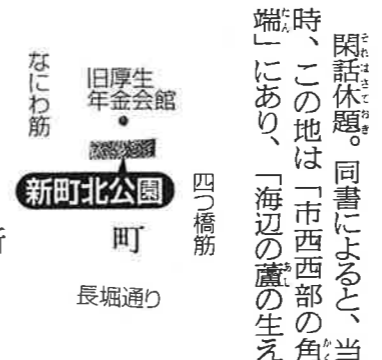
ひとくくりに表現できない一帯である。さすがに江戸期の遊郭をイメージするものはない。わずかに商店や民家の軒下に地蔵を祀った小さな祠を2つほど見つけた。遊女たちがお参りしたなごりではないだろうか。

新町 夕霧太夫 不浄門より出づ

新町

昭和はじめに刊行された『日本遊里史』という快書がある。それまで江戸や京都などの遊里を紹介した書物はあったが、この著書は大坂をはじめ、日本全国の遊里の歴史や街並み、風俗などを詳細に描いている。著者は上村行彰という人である。戦後なら、みずから「トルコロスト」を名乗り、これまた快書『ちろりん村頭未記』など一連のトルコ風呂モノを書いた風俗ライター、広岡敬一を思い浮かべさせるような人物である。大阪府の役人だというだけで、その経歴は分からない。当時は大阪府庁にも「人物」がいたことになる。

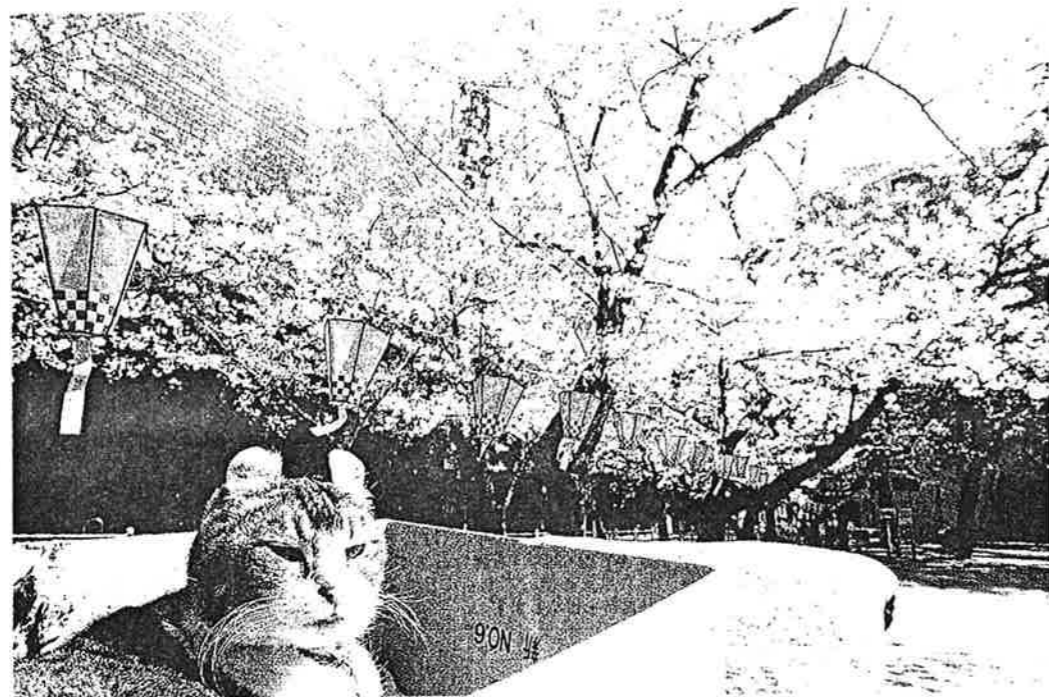
閑話休題。同書によると、当時、この地は「市西部の角端」にあり、「海辺の蘆の生え」の太夫第1号である。大変な美人のうえ、芸事も達者だったらしい。没年齢は22歳とも27歳ともいわれるが、大坂中の町民がその死をなげいたといわれる。「夕霧忌」は晩冬の季語にまでなった。



あみだ池筋

新

繁れる沼原と田圃の一部であった。伏見町の傾城屋である木村又次郎が土地を開墾、造成したうえ、最初の茶屋を建てた。その地は瓢箪町と呼ばれ、その後、市中の茶屋がつきつきと移され、佐渡島町、新京橋町、新堀町、吉原町とひろがっていった。四方は溝渠でかこまれ、東西には遊郭のシンボルである大門が造られた。当初は午後9時、その後は午後11時、太鼓の音とともに閉門となった。再三、火事に見舞われたため、避難用として、大門のほか、南北などに5カ所の新門が造られた。火事の際だけ開けさせるので、別名は「蛤門」とも呼ばれた。ハマグリは焼けるからである。



遊女たちの慰安のために、新町北公園には桜の木々が植えられた（鳥越瑞絵撮影）

新門は、別名を「手足の指は豊かにほそく、姿かたちはしとやかで肉づきよく、目つきは利口そう。声がよくて、肌の白さは雪とあらし、命のりの床上手」

「うちのほうが実際の夕霧にちかいはずである。」

（福嶋敏雄）